

## 64. 近代以降の博多川周辺における都市形成と水辺利用の関係についての研究

宮崎 大

## 1. 背景と目的

都市景観は、都市活動の状態や歴史的な蓄積が反映されており、単なる眺めの美しさだけでは評価できない。都市景観は都市の歴史や理念を体現するものであり、それゆえに都市の環境や個性を取り扱う際の重要な切り口となる。

また、都市景観への関心の高まりの背景には、単に日常的な空間の美化のみならず、景観を通してその街の歴史、文化、価値観を見つめるという動機がある。したがって都市景観の検討には、都市そのものの特徴とそこに営まれる社会的活動との関連性などについて、その価値やあるべき姿を論じる必要がある。

福岡市の中心市街地を流れる那珂川水系準用河川の博多川は大型商業施設が集積する天神を中心とした福岡部と、歴史的な地域である博多部の境界に位置し、沿川地域には川端商店街やキャナルシティ博多、博多リバレインなどの商業施設が集積している。しかし、川端商店街には川に背を向けた建物が多く残っており、河川空間に日常的に利用する市民の姿がほとんど見られず、現在、博多川は生活の‘ウラ’にあると言える。

写真-① 現在の博多川



本研究は、いつ頃、どういった経緯で‘オモテ’から‘ウラ’に移っていったのか、その変遷過程と都市形成との関係を調べることが目的である。

博多川・那珂川の歴史と周辺の土地利用、生活の上での利用の変化について、歴史的な文献や資料、絵図、写真、ヒアリングにより調査した。

## 2. 調査結果

## ①近世における博多

慶長5年(1600)黒田長政が福岡城と福岡のまちづくりに着手したと同時に福岡と博多を繋ぐために中洲の‘中島’に橋を架けた。その頃の中洲は河口に堆積したただの洲潟(デルタ)であり、中洲の歴史が始まったのは、すなわち博多川の歴史が始まったのは橋が架けられたこの頃だといえる。博多の町に関しても数回に渡って戦火で焼かれたのを最後に豊臣秀吉が天正15年(1587)に‘太閤割り’と呼ばれるまちづくりによってできている。

## ②近代における博多

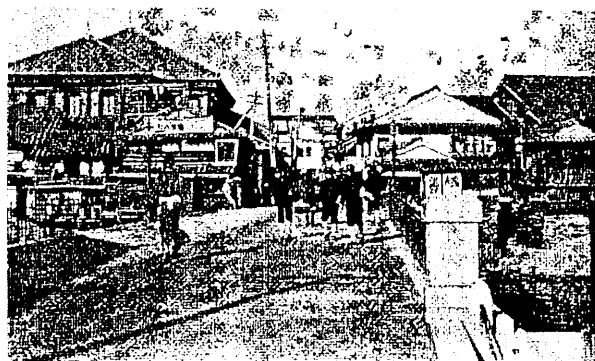
明治20年、第五回九州沖縄八県連合共進会が福岡で開催されることが決まり、対象地として挙げられたのが現在の東中洲である。その頃の中洲は、中島町、北端の浜新地など、西・東中島橋付近が最も栄えており、東中洲はいくつかの人家や商店があるほか、野菜畑が広がっていた。共進会が行われたことにより東中洲が発展。賑わいの中心も南のほうに移ってきた。さらに明治43年、第13回共進会が行われ、西大橋等、電車道の整備が行われ、近代かも含め大型の建物がその通りに建ち並ぶことになる。中洲の発展に伴い、博多川はまち(博多部)とデルタ(中洲)を挟む川が、まちとまちの間を流れる川として位置付けられるようになった。

また、近代以降、那珂川上流に工場が建つようになり、博多川はその工業排水により汚染が目立つようになった。それに対して周辺住民は幾度となく河川改修願を提出。中には博多川自体を埋め立てるといった提出もあった。(表-1参照)

河川利用に関して言及すると、近世には那珂川河口に入江が生まれ、舟運の利用が栄えた。中洲に賑わいが生まれる以前、博多川沿い、川端町側には商店が並び、商店の玄関は川に対して反対側にあった。それは、商人は商店が道の両側に並ぶことが、より利益を生むと考えていたからである。

しかし、住民が川に対して背を向けていたわけではなく、生活スペースは川向きに作っており、いくつかの個人の家には、川に下りる階段が存在している。

写真-② 大正初期の東中島橋



また、中洲の歓楽街の発展により、川沿いには料亭、待合、旅館が集結。川に面した客室が並び、川を眺めて楽しむ形が博多の一風景になっていた。

昭和20年(1945)、福岡市都心部は大空襲を受け、中洲及び博多の町は焦土と化してしまった。終戦直後、戦災復興区画整理事業に福岡市も指定

され、施行されることとなった。現在の福岡・博多のまちなみはその時の整備によるものが大きい。また博多川は、周辺地域の都市化により悪臭やガスが発生し、沿川地域の住民が喘息を起こし「川端喘息」と異名を付けられるほど汚染した。

### 3. 結論

博多川周辺は、以上のような変遷をしてきたことが分かった。産業の中での利用、生活の上での利用、娯楽の中での利用があり、人々の生活の一部であったのである。

参考・引用文献:

- 1) 映山恭三：博多中洲ものがたり前編・後編，文献出版，1979
- 2) 小田部博美：博多風土記，海鳥社，1969
- 3) 福岡市総務局編：福岡の歴史・市制九十周年記念，福岡市，1979
- 4) 井上精三：福岡町名散歩，葦書房，1996
- 5) 落合栄吉：戦後博多復興史，戦後博多復興史刊行会，1967
- 6) 福岡市編：福岡市史・明治編～昭和編続編，福岡市役所，1959～1997
- 7) 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編：角川日本地名大辞典・40 福岡県，2002
- 8) 橋詰武生：明治の博多記，福岡地方史談話会，1971
- 9) 博多を語る会編：大正の博多記，限定，1974
- 10) 博多を語る会編：博多の橋の歴史，博多を語る会，出版年不明
- 11) 洋社編：福岡市商工案内地図，銀洋社，1932
- 12) 銀洋社編：福岡市縦横詳細地図，銀洋社，1938

表-1 近代以降の博多川整備の変遷

年代	博多川に関する整備及び計画	整備、計画の内容	出願者
江戸時代 (延宝年間頃)	川縁に家が建ち並び始める。		
明治33年	博多川水面埋立並び運河新設願	12mほど残して埋め立て、下水溝を暗渠として水路を浚渫して運河にする計画。上西町の住民出願。	上西町住民
		同年、博多中島町住民出願。内容もほぼ同じ。水利上の問題などにより、実現せず。	博多中島町住民
明治42年	博多川東岸埋立及び下水道溝設置	東岸住民35名による出願で、町内の鎌倉による民間埋立工事。およそ幅5m、瓦町から下鍋町まで約1kmに下水溝が設置され、埋立地のほとんどは民有地となる。築かれた石垣の上には長さ約650mの龍塀が建っていたという。また、下水溝が整備されたことにより、汚染も軽減された。	川端町住民
	那珂川局部改修及び埋立出願	上の東岸埋立と競願された。早良郡の者からの出願で、博多川に関しては、幅6mほど残して残りを埋め立てるという計画。	早良郡住民
明治44年	電気軌道支線敷設のための博多川西岸の埋め立て計画		市会
昭和8年	博多川西岸埋立及び下水道溝設置	博多川の汚染がさらに悪化。県から市に対しての敵命もあり、水車橋から大黒橋まで約1km、左岸管渠上の埋立。川に流れ込んでいた汚染は海に放流されることとなった。汚染、悪臭も和らぎ埋立地上は、繁華街に近い所では舗装されるところもあり、川沿いに屋台が並んだという。屋台街は大東亜戦争が悪化した昭和18年に撤去	市
昭和18年	川中幅5m、深さ2m掘り下げ、水路にし水を溜め、戦争に備えた。		市(国)
昭和20年	福岡大空襲により、焦土と化す	被災範囲は博多川沿いは、橋田神社以北、中洲一帯。	
昭和21年	戦災復興計画による、博多川東岸河畔道路計画	戦災復興計画により、瓦町より下鍋町大黒橋まで幅15mの道路を作るという計画。15m道路案は、川端の罹災370余の商店主たちが結束し、道路案撤去を申請、その理由は、もし実現すると、川端商店街が西向きになり、西日を受け、商品が痛み、商売にならないから、というものであった。予定地に家が建ち始めていたこともあり計画は中止された。	市(国) 反対・川端町住民
昭和38年	博多川水面上の駐車場設置	東中洲河畔の博多川筋道路における車の通行が頻繁になったこともあり、請願書が地元住民により提出された。設置費は地元で負担するという内容で、市に寄付されたが、管理運営は博商會が持った。	地元住民(博多川対策協議会)
昭和43年	博多川に可動堰設置	フラッシング効果により水質を良くした。	市
平成3年	博多川夢回廊構想	水車橋以北は平成12年完成(第一期工事)	博多川整備構想検討委員会(地元住民、学識経験者などから成る)

背景・黒…実際に行われた整備 背景・白…中止された計画

## 64. Study on Relations between Urban Development and Waterfront Use in Hakata River

Hiroshi Miyazaki

The Hakata river flows in the downtown of Fukuoka City. Moreover, it is located in the boundary of the Fukuoka part in which it centered on a large-scale, commercial facilities and the Hakata part that is a historical region. However, the appearance of the citizens who use it daily is hardly seen there.

It can be said that the Hakata river is on the other side of life now. Thinking how to be going to do in the future by paying attention in the age when the Hakata river was a part of life is this research. In this research, the essence of various problems held today is clarified by arranging the history, the land use, and the use of the river. To examine the appearance when the Hakata river was crowded, a historical document, material, the drawing, and the photograph were collected. And, hearing was investigated.

It prospered by using the ship in the mouth of Nakagawa river at the early modern age. The shop stood in a row in the Hakata banks of a river before crowding Nakasu, and it was on the other side for the river the door in the shop. However, the life space was made for the river.

Moreover, the restaurant, the assignation house, and the inn concentrated on the banks of a river by the development of the amusement center.

People were enjoying looking at the river in the guest room where it had faced the river.

It has been understood the river in the river as industry, the river in life, and the amusement and to have been used.